

4 木 製 品 (PL. 66・67, Fig. 51)

木製品は、SE6166 (第52次調査 6ADC-K区), SE7110 (第71次調査 6ADD-P区), SD6482 (第52次・62次調査 6ADC-G・H区) などの遺構から出土した。なかでも SE6166からは比較的多くの木製品が出土した。まず奈良時代の木製品について種類ごとに述べ、次に奈良時代以降

* の木製品を一括して述べる。

A 奈良時代の木製品

祭 祀 具

削掛け (1～9)

削掛けは SE6166, SD6151・6482・5960

* の各遺構から出土した。

SE6166からは1～6の6本の削掛けが出土した。1～4はヒノキの薄板の一端を削って圭頭状にし、他端をとがらせている。いずれも側面に各々1箇所ずつ切込みを施すB₂型式に属する。1箇所の切込み回数は、1が3回、2・4も割れ口からみて3回、3は1回である。3・4は両面を割り面のままとし、1・2は片面のみを荒く削り平滑とする。

	全 長	最大幅	最大厚	材 質	型 式
1	31.5	2.95	0.3	ヒノキ	B ₂
2	30.7	3.2	0.25	ヒノキ	B ₂
3	26.8	3.6	0.2	ヒノキ	B ₂
4	(19.8)	3.15	0.4	ヒノキ	B ₂
5	(26.4)	0.95	0.7	ヒノキ	不明
6	25.1	0.85	0.55	ヒノキ	不明
7	23.1	2.5	0.3	ヒノキ	B ₂
8	(15.5)	2.2	0.3	ヒノキ	B ₂
9	(14.9)	2.75	0.2	ヒノキ	B ₁

Tab. 15 削掛け計測表 (単位 cm)

* 5・6は薄板の側面に切込みを入れるものと異なり、角棒の稜に切込みを入れる。厚さ1 cm 内外の板から角棒を割り取り、頭部を斜めに削り角錐状とし、一端をとがらせる。5は割放しのままで6は四面を削る。切込みの位置・回数はほぼ同じである。各々対角線上の2本の稜に、2カ所と3カ所の切込みを入れる。切込み回数は各所とも1回である。SE6166出土の削掛け6本は、型式や大きさからみて、1と2、3と4、5と6の2本ずつ3組にわけることができる。

* 7は下端を欠失するがほぼ完形である。頭部側面の左右一カ所に一回の切込みを入れる。側面のみに削りを行ない、表・裏面は割り面のままとする。B₂型式。SD6482出土。8もB₂型式で側面の左右一カ所に一回の切込みを入れる。切込みはひじょうに深く左側の切込みで5.7 cm に達する。下端を欠失し腐蝕が著しい。SD6151出土。9は破損により全形をとどめない。頭部の左右が欠失しており、切込みの有無は不明である。ただし欠失の状態からみて、頭部上

* 端から切込みを入れるB₁型式になると思われる。下端を欠失し腐蝕が著しい。SD5960出土。

1) 『平城宮報告IX』p. 76。

2) 黒崎直「斎串考」(『古代研究』10) 1976では本例をF型式としている。

ii 食 膳 具

杓子 (10・11) 10はB型式の大形杓子である。薄い板目材を用い、身の表面は荒く削り、裏面は割り面のままとする。身の側縁部は斜めに削り薄くしている。柄の大部分と身の半分を欠失する。全長 (22.7cm)、身幅 (4.3cm)、身厚0.4cm。ヒノキ。SD6159出土。11も同じく身の先端を半円形とするB型式の杓子である。薄い割り材を加工して仕上げる。身中央はさらに丁寧 *
に削ってくぼませる。表面と側面は荒く削り、裏面は割り放ちのままとする。全長 (13.6cm)、幅 (2.3cm)、最大厚 0.3cm。スギ。SE6166出土。

iii 容 器

曲物容器 (13~15, 17, 20) 13は SE6166から出土した完形の曲物である。厚手の材を用いた堅牢なつくり。側板上端部がつぶれて内傾しており、本来の高さをとどめない。直径22.8 *
cm、厚さ0.8cmの底板に、高さ13.2cm、厚さ0.35cmの側板をつける。側板は幅0.8cmの樺皮で、6段潜り一列で縫いつけ、横に一段引きだして縫いおわる。側板内面の一部に縦および斜め方向の刻線 (シラビキ) がある。側板下端には幅2.2cm、厚さ0.2cmのタガをまわし、9カ所を木釘で留める。タガは重ね合わせを長くとり、2カ所を樺皮1段潜りで縫いつける。重ね合わせ部分にシラビキを施す。側板・底板内面を黒く塗る。14は第Ⅱ期の南北棟掘立柱建物 SB5955 *
の東側柱列南から2番目の柱掘形から出土した。直径16.6cmの底板に、高さ6.95cmの側板をつける。側板は上端を小さく切り欠いて、3段潜り一列で縫いつけ、横へ引きだして縫い終わる。底板は柾目材で6カ所に木釘を打ち込んでとめる。タガはない。側板の内面には重ね合わせ部分を中心にシラビキを施す。側板・底板内面を黒く塗る。15・17は曲物底板。15はほぼ全容をうかがえるが、割れ・腐蝕が著しく木釘穴をとどめない。柾目材。直径 (21.6cm)、最大厚 *
0.5cm。6ADD-P区出土。17は柾目材で一カ所に木釘穴をとどめる。側縁は斜めにたつ。表面には刃物のあたりのような刻線が縦横にはしる。裏面には腐蝕による凹凸がある。全長 (11.35cm)、幅 (3.55cm)、厚さ0.6cm、復原径16.4cm。SD5960出土。20は SE7110から出土した大形の曲物。直径38.8cmの底板、高さ27.8cmの側板をつける。上下2段にタガをまわす。上段タガ幅4.9cm、下段タガ幅5.2cm。側板は幅0.8cmの樺皮を用いて2列に縫いつける。側板上端から *
下端へ向かって左列を4段潜りで縫い、右列へ移り下から上へ向って3段潜りで縫いつける。底板とは木釘で固定する。側板下端に上下2列に木釘穴がめぐり、そのいずれにも木釘の残るものがある。上段の釘穴を用いて底板をとめ、下段の釘穴にうった木釘で補強したものであろう。底板内面には側板のとりつけ位置を示した円形の刻線がある。側板内面にシラビキはない。側板・底板内面を黒く塗る。この他 SE7008からは井戸枠として用いられた曲物が出土し *
ている。底板は無く、直径34cm、高さ18cmの側板下端に、幅6cmのタガがまわる。10の底板がスギ、あとはすべてヒノキ。

押敷底板 (16) 大形の隅丸長方形もしくは方形の押敷の底板であるが破片のため全容は不明である。綴穴の痕跡を一カ所に残す。長さ (17.3cm)、幅 (9.8cm)、厚さ 0.6cm。ヒノキ。SE6166出土。 *

1) 『平城宮報告Ⅶ』 p.119。

iv そ の 他

黒漆塗部材 (12) 柁目材を削り出した断面楕円形の棒状部材。一端は角を落とし丸く仕上げる。表面中央に幅 1.7cm にわたり一段削り込んだ部分があり、黒漆はこの部分に施されている。下地はなく木地に直接黒漆を塗ったものと思われる。他端は折損・腐蝕しているが、斜め* に他の部材を組合わせられるような溝が切られている。さらにこの部分の外面にも漆が厚く塗られている。全長 (16.2cm)、上端幅2.3cm、下端幅2.7cm ケヤキ。SE6166出土。

板状木製品 (24) 柁目の板状品。木口には切断面をそのままとどめる。その他の面は削りによって平滑にする。ただし裏面を中心に腐蝕がすすみ凹凸が著しい。全長 22.3cm、幅 3.4cm、厚さ 0.85cm。SD6181出土。

NO.	長 さ	最大幅	材 質
22	(17.6)	1.1	ヒノキ
23	(19.2)	2.15	ツバキ
24	22.3	3.4	ヒノキ
25	(24.3)	1.3	不 明
26	(31.2)	1.8	ヒノキ
27	(31.9)	1.45	ス ギ
28	22.3	3.4	ヒノキ

Tab. 16 板状・棒状木製品計測表
(単位 cm)

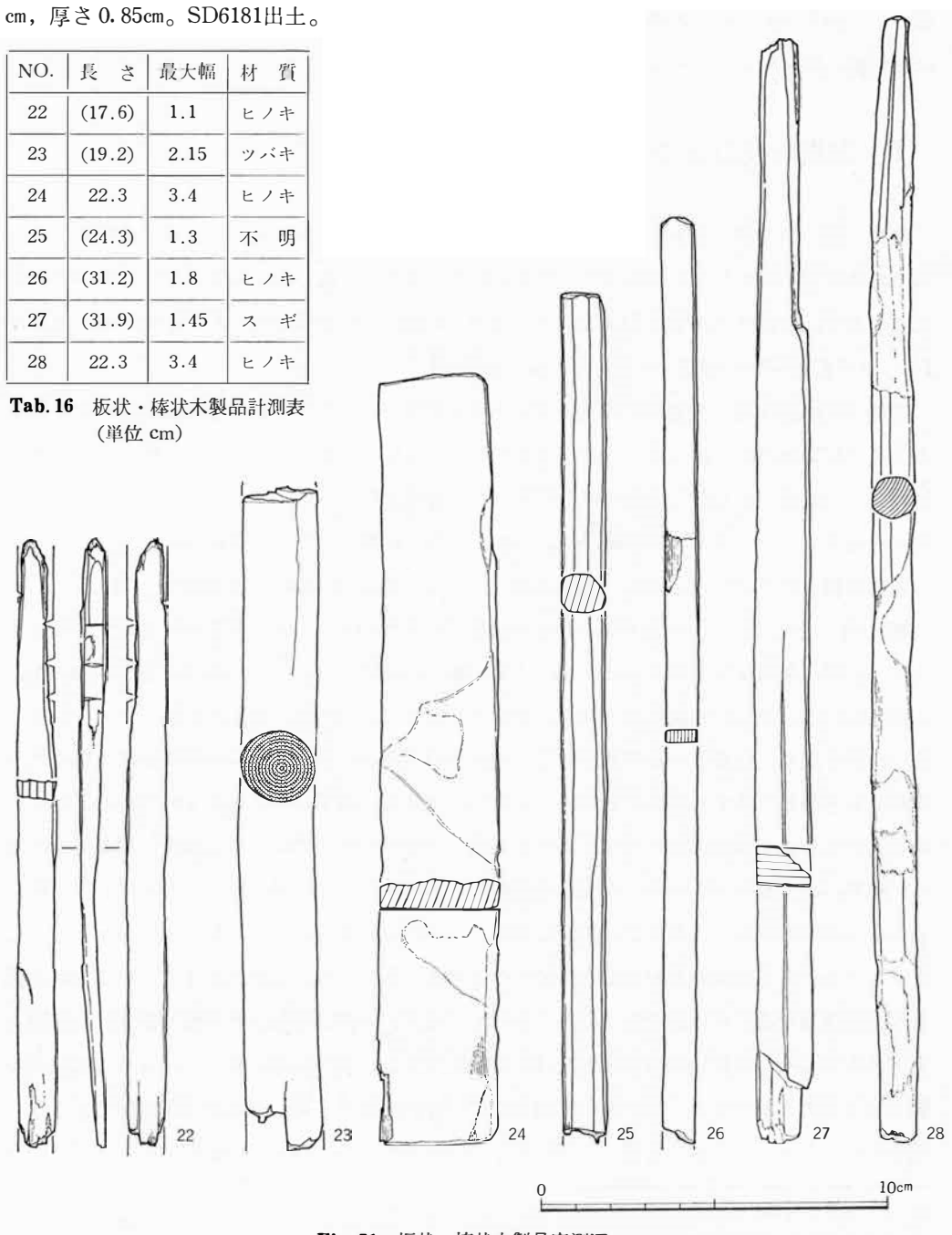


Fig. 51 板状・棒状木製品実測図

棒状木製品 (22・23・25～28) SE6166からは割材を加工した棒状木製品が5本出土した(22・23・25～27)。22は両端を折損する。厚さ1.1cmの板材から割り取った棒状材の6カ所に切込みを入れる。上部両側面は、右側面3カ所、左側面2カ所に浅く切込みを入れるが、腐蝕のため切込みの基部を残すのみである。下部の切込みは1カ所で削掛け5・6のように稜に斜め上方から切込まれる。削掛けの一種とも考えられる。23は心持材の表面を丁寧に削り、断面円形の棒状としたもの。両端を折損する。25は角材を荒く面取りし、丸棒状とする。一端を折損する。26は一端を削りによって丸く整え、他端を折損する。表裏・側面ともに削りによって平滑にする。27は一端に出柄を作る。斜めに別の部材と組み合わせたものと思われる。他端を折損する。28はSD6482から出土したもので、一端をやや細く作りそこから8cm下がった点を中心に、上下約5.5cmにわたる腐蝕し細くなった部分がある。この腐蝕部分を側板のあたりとすれば、柄杓の柄と考えることができる。

B 奈良時代以降の木製品

横櫛 (21) 鋸で細い歯を挽きだした挽歯の横櫛である。平面形は長方形のA型式に属する。ムネはゆるやかに弧をなし、断面は半円形となる。歯の挽き通し線はムネに平行してゆるやかに弧をなす。歯数は2cm当り24本である。全長(4.1cm)、厚さ0.8cm、ムネ高0.95cm、歯長3.1cm。9世紀末～10世紀初。イスノキ。SE 7094出土。

漆椀 (18) 横木取り挽き物の漆椀。底部と体部の境がはっきりし、体部は直線的に立ち上がる。高さ1.35cmの高台がつく。内面はゆるやかに彎曲し半球状となる。そのため底部と体部の境目付近の器壁が厚くなる。内外面とも黒色の下地を施した上に朱漆を塗る。高台内の底部外面に黒漆で「二」と書く。口径12.5cm、高さ6.35cm。中世。ブナ。SK6169出土。

曲物容器 SE6123は井戸杵に大形の曲物を用いる。直径約70cm、高さ約10cm。11世紀。

轆 (19) 心持材の表面を荒く削り断面を長方形にしたのち、中央から山形に曲げて作る。3カ所で折損し左端を欠失する(以下上下・左右は轆を装着した状態を、牛の背後から見た場合を指し、前後は進行方向による)。中央の屈曲部と左右の先端部とは、比較的丁寧な削りを行なう。右の先端部は細く削り、ゆるやかに彎曲させる。中央部の下面から前・後面にかけて顕著な紐ずれの痕跡をとどめる。紐ずれ痕は左右17cmにわたる。全体では紐ずれの痕跡を4カ所にとどめる。中央部から左右の直線部分にうつるあたりには、内側へむかってゆるやかに隆起する箇所がある。幅38.1cm、全高(31.2cm)、中央部断面幅4.7cm×厚さ3.8cm。轆の類例としては藤原宮西方官衙地域SK1380から、むながい棒および轆との連結部材を伴って出土した完形品²⁾をあげることができる。7世紀末の藤原宮造営時のものと考えられている。藤原宮出土のものは、轆と轆とが連結部材を介して直結する長轆式のものであるが、本例は連結部材がなく紐ずれの痕跡をとどめるところから短い轆の先端から、綱(横綱)が伸び、轆の両端に結びつけられる短轆式の轆と考えることができる。轆からの横綱を結びつけた痕跡が右端に残る紐ずれ痕跡であろう。絵巻物によれば、しりがいも同一箇所²⁾に結びつけられている。むながいは左右の直線部分中位

1) 『平城宮報告Ⅶ』p.113。

2) 『飛鳥・藤原宮跡発掘調査報告Ⅱ』1978 p.77～78。

に残る紐ずれ痕跡に結びつけられたと考えられる。ただし中央部に残された顕著な紐ずれ痕跡の機能は不明である。11世紀。SK6509出土。

C 部 材

今回の調査では、掘立柱の柱根・礎板・木樋暗渠・井戸枠などの部材が出土している。小形
* の木製品とは別に、部材としてまとめて述べることにする。樹種鑑定、計測を行なった資料は柱根88本、礎板25点、井戸枠12点、木樋3点である。

i 柱 根

いずれも心持丸太材の表面を手斧によって縦に削る。そのため断面が不整形な多角形となる
* ものが多い。ただし現在のこっているのは地中に埋め込まれた部分であり、地上で柱として機能する部分については、ヤリガンナなどで円形に仕上げられていたものと思われる。下端の小口面は手斧削りでととのえられ、鋸で切断したものは見られなかった。手斧による削りは全体に荒いもので、小口面に段差のつくものや、斜めになるものがある。

樹種は調査した88本のうち、ヒノキ47本 (53%)、コウヤマキ35本 (40%)、ツガ2本、不明
* 4本である。ヒノキとコウヤマキの比率について平城宮内の平均値ヒノキ61%、コウヤマキ35%とくらべると、ヒノキがやや少ない傾向を示していると言える。また SB6172は6本の柱のうち2本がツガ、他4本も広葉樹で、本調査区内では特異な存在である。第Ⅱ期の南北棟掘立柱建物 SB5955・5956は、柱根の残りの良い建物であるが(柱根残存率SB5955: 85%, SB5956: 45%)、当初に造営された SB5956にはコウヤマキが用いられ、増築された SB5955にはヒノキが
* 用いられている。次に述べる時期的な用材の変遷もあわせて興味深い結果である。

年代的に見ると、古い建物にコウヤマキの使用が多い傾向をうかがうことができる。第1次大極殿地域においても、第一期の東楼 SB7802と南北塀 SA3777にコウヤマキが用いられ、第二期の掘立柱建物 SB6640・6650・6660などにはヒノキが用いられている。ただし宮内の他の地域では資料点数が少なくはっきりしないが、今のところこのような傾向は認められない。

* 柱根の径は建物毎に特定の数値に集中する傾向を見せる。本調査地域内で特徴的な桁行の長い建物では、平均径が20.42cm (SB5951), 20.85cm (SB5955), 18.00cm (SB5956), 23.05cm (SB6100) と、いずれも20cm前後の比較的細い材を用いている。これに比べ桁行・梁行とも3間で総柱となる SB6140や SB6340では、径30cm前後の材が用られており、倉庫としての荷重を考慮した用材となっている。また南北塀 SA5950は3本残った柱根の平均径が41.07cmと宮内でも大形の部類に属する。同様な機能を持つ掘立柱塀では、第1次大極殿東面を画する SA3777
* の柱根平均径が44.06cmで、40cmを超える太い材を用いている。

柱根下端に筏穴のあるものは少ないが、SB6425では残存する5本の柱根すべてに筏穴が残る。さらに SB6425の筏穴は宮内の柱根に一般的に見られる手斧であけた大形の筏穴と異なり、ノミであけたと思われる小形の筏穴となっている。

1) 島地謙・伊東隆夫「古代における建造物柱材

p. 49~76。

* の使用樹種」(『木材研究資料』第14号 1979)

2) 『平城宮報告XI』p. 139。

ii 礎 盤

礎盤は25点出土した。いずれも不整形な割り材を用いている。礎盤と言うものの角材状のものが多く、井桁状に組みあげた上に柱を載せている。樹種はヒノキ13点 (52%)、コウヤマキ7点 (28%)、スギ5点 (20%) となり、スギの比率がいくぶん高い。今回は明らかに転用材と認められる礎板の出土はないが、SA5950の礎盤には筏穴の痕跡を残すものがある。*

iii 井 戸 杵

3基の井戸について井戸杵の計測、樹種鑑定を行なった。いずれも11世紀後半から12世紀の井戸である。SE6300の杵板は横板井籠組井戸杵一段分が残り、南北の杵板は両端中央に突出を作り、東西の杵板はそれに応じた欠き込みを作って組み合わせる。内面には手斧による削り痕跡が残る。SE6130・6146は縦組井戸で、縦板と横棧が同一樹種でできている。*

iv 木 樋

底板1枚と側板2枚が残っている。腐蝕が著しく本来の長さをとどめない。底板中央の両側縁近くと側板の対象位置に柄穴と考えられる長楕円形の穴があいており、底板と側板とを太柄で連結していたと推定される。

種類	遺構番号	柱位置	長 さ	径(幅)	樹 種	種類	遺構番号	柱位置	長 さ	径(幅)	樹 種
柱根	SB3690	六 イ	90.6	34.8	コウヤマキ	礎盤	SA5950	八十	72.5	19.0	ス ギ
		十一イ	83.5	30.5	〃				92.3	26.0	ス ギ
		十四イ	72.4	30.0	〃			九十三	31.3	8.5	ヒ ノ キ
		一 ハ	56.6	34.4	〃	柱根	SB5951	八 ロ	23.0	9.1	ヒ ノ キ
		六 ハ	76.8	31.7	〃			五 ニ	72.6	17.5	コウヤマキ
		十二ハ	46.5	26.4	〃			六 ニ	35.8	22.7	ヒ ノ キ
柱根	SA5950	NJ 49	(91.5)	38.7	コウヤマキ			八 ニ	49.8	20.8	〃
		GC 49	(88.6)	41.5	〃			十 ニ	66.8	20.3	〃
		HH 50	(64.2)	43.0	〃			十一ニ	61.9	20.8	〃
礎盤	SA5950	六十二	59.5	16.9	ヒ ノ キ	柱根	SB5955	一 イ	60.9	16.4	ヒ ノ キ
		〃	47.5	17.2	〃			二 イ	51.5	19.5	〃
		〃	47.7	16.8	〃			三 イ	65.6	20.9	〃
		〃	45.1	7.3	〃			四 イ	63.0	21.0	〃
		〃	30.2	13.8	〃			五 イ	52.4	18.4	〃
		〃	47.2	16.8	〃			六 イ	44.6	20.9	〃
		六十三	37.4	6.6	コウヤマキ			七 イ	46.6	22.6	〃
		〃	51.0	16.9	〃			八 ロ	48.5	19.8	〃
		〃	55.2	16.3	?			一 ハ	73.2	20.9	ヒ ノ キ
		六十八	68.4	18.1	ス ギ			二 ハ	42.1	18.3	〃
		〃	71.8	18.2	〃			三 ハ	56.1	19.3	〃
		八十	102.7	26.1	ス ギ			四 ハ	56.8	21.2	〃

Tab. 17 木製部材一覧 (単位 cm)

種類	遺構番号	柱位置	長さ	径(幅)	樹 種	種類	遺構番号	柱位置	長さ	径(幅)	樹 種
柱根	SB5955	五 ハ	46.4	21.8	ヒ ノ キ	柱根	SB6172	三 イ	36.8	15.5	不明(広葉樹)
		六 ハ	48.5	16.6	〃			四 イ	44.4	—	不明(広葉樹)
		七 ハ	54.0	23.5	〃			三 ハ	33.6	10.5	不明(広葉樹)
		八 ハ	37.4	21.2	〃			四 ハ	18.9	9.6	不明(広葉樹)
		九 ハ	36.1	23.4	〃			九 ハ	64.6	23.5	ツ ガ
柱根	SB5956	二 イ	89.0	14.5	コウヤマキ	柱根	SB6175	一 ハ	49.3	23.8	ヒ ノ キ
		六 イ	124.5	17.3	〃			五 ホ	53.6	33.5	〃
		八 イ	79.1	18.3	〃			六 ホ	17.9	17.1	〃
		十 イ	(61.6)	19.7	〃	礎盤	SB6185	二 イ	35.4	18.3	コウヤマキ
		一 ハ	91.0	16.0	〃			三 ハ	20.6	17.1	〃
		四 ハ	54.3	18.2	〃			三 ホ	33.7	13.6	ヒ ノ キ
		六 ハ	64.4	17.0	〃	柱根	SB6330	四 ロ	50.6	20.4	コウヤマキ
		七 ハ	79.0	19.3	〃			一 ハ	74.8	28.4	〃
		八 ハ	(60.8)	19.8	〃			三 ニ	57.7	29.2	〃
		十 ハ	45.1	16.1	〃	礎盤	SB6340	一 ロ	32.5	9.6	コウヤマキ
柱根	SB6100	十五イ	50.1	21.6	コウヤマキ			二 ニ	27.8	15.7	〃
		四 ハ	56.7	24.5	〃	柱根		三 ニ	39.2	30.3	ヒ ノ キ
柱根	SB6120	四 イ	75.9	23.8	コウヤマキ		SB6345	六 ハ	39.8	22.8	ヒ ノ キ
		五 イ	64.4	23.0	〃	礎盤	SB6400	三 ロ	38.0	14.5	ヒ ノ キ
		七 イ	82.5	23.2	〃				28.2	15.2	〃
		八 イ	53.6	13.2	ヒ ノ キ				44.0	7.6	〃
		九 イ	86.5	25.6	コウヤマキ				36.5	9.8	〃
		二 ニ	41.1	23.9	コウヤマキ	柱根	SB6401	三 ロ	52.2	22.1	コウヤマキ
		四 ニ	50.5	24.2	〃	柱根	SB6425	一 イ	110.8	27.8	ヒ ノ キ
		五 ニ	101.6	23.6	〃			二 イ	100.1	28.9	不明
		六 ニ	110.0	23.4	〃			七 イ	55.8	19.7	ヒ ノ キ
		七 ニ	49.4	25.9	ヒ ノ キ			一 ロ	58.5	25.7	〃
		八 ニ	41.1	23.9	コウヤマキ			二 ハ	116.7	27.8	〃
柱根	SB6130	二 イ	46.1	34.6	ヒ ノ キ	柱根	SB6428	一 ニ	38.7	7.6	ヒ ノ キ
柱根	SB6140	三 イ	30.6	37.9	ヒ ノ キ	柱根	SB6450	五 ロ	62.7	24.2	不明
		四 ロ	31.7	31.0	〃			五 ハ	64.2	25.2	〃
		三 ハ	31.3	18.6	〃			五 ニ	82.2	25.0	〃
		一 ニ	62.5	35.8	〃			五 チ	49.0	23.7	ヒ ノ キ
		三 ニ	53.1	27.4	〃	柱根	SA6994	一	56.1	18.6	ヒ ノ キ
礎盤	SB6171	一 イ	28.0	11.5	コウヤマキ			二	42.3	15.0	〃
柱根	SB6172	二 イ	79.0	23.3	ツ ガ						

Tab. 17 木製部材一覧 (単位 cm)